

日中活動支援事業の全職員が一堂に会しての研修会を昨年9月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止とし、その代替として、職員個々が文献研究にとりくみました。

文献研究の題材は、殺傷事件から5年を迎えようとしている「津久井やまゆり園事件」です。死刑にすることで、この事件を終わらせてはいけない、なぜこの事件が起きたのか、命と人権の問題を考え続けなければなりません。以下、私の報告をお読みください。(第4回)

文献名「相模原障害者殺傷事件—優生思想とヘイトクライム」  
立岩真也、杉田俊介 共著 (青土社) 2017年1月5日第1刷発行

なぜ、植松死刑囚は、殺傷事件を起こしたのか。雨宮処凛著「相模原事件裁判傍聴記」(太田出版、2020年7月26日第1刷発行)では、精神鑑定をした2人の医師の証言が紹介されている。公判で、精神鑑定をした大沢医師からは、「パーソナリティ障害、大麻使用障害、大麻中毒と診断したものの、大麻が犯行に及ぼした影響については、影響がないか、影響を与えないほど限定的だった」「妄想ではないとし、病気による発想ではなく、やまゆり園での経験や世界・社会情勢を見聞きしたことにより形成されていった」と。もう一人の工藤医師からは、「犯行当時の植松被告は、大麻精神病の状態だった」「大麻の影響で行動を支配され、本来の人格とは異なる異常な精神状態だった」との証言があった。

ここで、杉田俊介に戻り、「植松青年が、衆議院議長に宛てた3枚の手紙が公開されている。『私の目標は、重複障害者の方が、家庭内での生活、及び、社会生活が極めて困難な場合、保護者の同意を得て、安楽死できる世界です。』『いまこそ、革命を行い、全人類のために、必要不可欠である辛い決断をする時だと考えます。日本国が大きな一歩を踏み出すのです。』手紙の言葉から感じられるのは、世の中の役に立ちたい、日本や世界のために、何か為したいという切迫した欲望である」、そして、「世の中や誰かの役に立たない自分を許せない、どうしても受け入れがたい、という感覚であり、欲望なのだから」。

「植松青年が何らかの精神疾患の当事者であるというなら、彼の中の障害者殺しの思想は、おそらく、彼自身にもさしむけられていたはずだ。…過剰な刺青の入れ方といい、顔の整形手術といい、彼には、身体改造へと向かっていく欲望があり、別の存在へと変貌しようとする願望があった。彼のそうした異形のキメラ(生物学で、同一個体中に遺伝子型の違う組織が互いに接して存在する現象)的な身体は、そのまま、彼の内なる優生思想や自己破壊の軋み、歪みを示してしまっているかにも見えた。」と。

キメラ【chimera】 1 ライオンの頭、蛇の尾、ヤギの胴をもち、口から火を吐くというギリシャ神話の怪物。キマイラ。2 生物学で、異なる遺伝子型の細胞が共存している状態の1個体。植物では接ぎ木したものにみられ、動物では異系統の発生初期の胚を融合させて作った人工キメラマウスなどがある。

「パーソナリティ障害」であれ、「やまゆり園での経験や世界・社会情勢を見聞きしたことにより形成された」であれ、「大麻精神病」であれ、植松死刑囚は、19人を殺し、26人を傷つけた。そして、自分自身も「心失者」となり、自分が言った「やばいですよね、いらねえですよね」の人間となった。だからこそ、控訴を取り下げたのではないか。  
一次号に続く(日中活動支援事業責任者 竹部直子)